

厳寒の中、真つ暗な夜を明かす

東日本大震災によって津波被災した特別養護老人ホーム「杜の里」(理事長・山崎和彦氏)の報告の2回目である。

地震発生直後から、停電のため、照明、暖房、給湯設備すべてが停止し、エレベーターも既に使用できなかった。津波警報とともに入居者の避難誘導を開始し、15時01分には特養1階の入居者49名の2階への避難が完了。そして15時11分には、ケアハウス利用者44名の特養2階への避難が完了した。15時30分、津波の第1波が到来する。施設長の佐藤久義氏は次のように言った。

「真つ黒い塊のようなものが、あつという間に押しよせて来ました。そして仙台東部道路にぶつかると、渦を巻いて戻ってきたのです。そんな中、職員たちは意外なほど落ち着いて行動しているように見えました」

避難は無事に終えることができたが、この日の東北地方における自然の猛威は、情け容赦のないものだった。地震の直後から雪が降り出し、入居者の溢れた居室や廊下は一気に気温が下がり始めた。暖をとるための布団や毛布、衣類は限られた数しかなかったから、使える段ボールや畳をかき集めて使用した。

「老いること」と「死ぬこと」の尊厳に向き合うために 82

津波被災のために 孤立した介護施設が、 なぜ1人の死者も出さなかったのか

社会福祉法人 杜の里福祉会(仙台市若林区)理事長・山崎和彦氏への取材より——その2

■ 佐藤 幹夫

大きな余震が幾度となく繰り返された。こうした中、吸痰の必要な入居者、点滴が必要になった入居者もいた。中には状況が理解できなくて、「何があったのですか? 戦争でも始まったのですか」と尋ねた利用者もいたという。

幹部職員たちを中心とした話し合いが行われ、この状況で数日を過ごさなければならぬことは確実だろうという結論になった。入居者の部屋割、トイレの使用方法も全員で決めた。泥をかぶった缶詰を拾い集めると、食材は、辛うじて3日分ほどの備蓄だろうと推測された。しかし、孤立状態がいつまで続くのか分からなかったから、栄養士は、3日分を6日分にするつもりで量を調理して出すことにしたという。缶詰やおかゆは利用者に優先され、スタッフは1枚の乾パンで済ませた。

夜になっても灯りは点かず、真つ暗闇の中で介護だった。スタッフたちは暗くなる前に夕食と排泄介護を済ませたが、これから、寒くて、厳しい夜を越さなくてはならない。外部とはわずかながらも連絡が取れるようになってくるものの、家族の安否のままならない職員は1人や2人ではなかった。

スタッフたちの記録を引く。

《明るいうちに排泄介助を行い、余震に



「杜の里」付近から見た仙台東部道路。東日本大震災の津波発生時には、この道路が防波堤のような役割を果たした。

備えて各居室のタンスや仕切りを壁側に移動し、ベッドも食堂・廊下に出しました。暗くなるにつれて寒さも増し、タオルケットや衣類、タオル等で可能な限り保温に努め、介護員も入居者も一緒になって一晩過ぎました。余震が続く中、眠れない入居者がたくさんいらっしゃいました。暗い中、つながらない業務用PHSの小さな液晶の明かりを使用しました。暗くなって入居者のラジオからの情報で、死者の数、被害の状態を初めて耳にしてやっと現実だと実感しました。とにかく余震の続く暗闇の中、寒さに耐えていました。朝になっても

状態は変わらず、入居者と一緒に過ごしながら何度も外を見てはため息をつくしかありませんでした。瓦礫の中に取り残されたという気持ち、もう駄目だという絶望感；でも何とかしなければという気持ちの揺らぎの繰り返しでした。（Nさん、女性）

さらにもうひとつ。
《一晚ケアハウスで過ごしている間、水で浮いた車同士がぶつかり、きしむ音やヘリコプター、消防車のサイレンがずっと続き、サイレンの音は翌日になっても耳に残った。入居者用のベッドや布団もなく、ソファーをつなげて横になってももらって

いたため、下肢のマッサージをして身体が少しでも楽になるよう努めた。夜中にラジオオから「荒浜で約200名の遺体を確認」との内容が流れてきた時には、夢を見ているのではないかと思ったが、自分たちは閉じ込められており、周囲の状況が分からないだけで、かなり深刻な状況なのではないかと恐ろしく感じた。（Iさん、女性）

山崎理事長は言う。

「寒さが相当厳しかったので、職員が毛布代わりに抱きしめてマッサージをし、温めて助けたのです。普段通りの介護しかしなかったら、低体温症になり、たくさんの方が亡くなっていたはずですよ。ぼくは記録を読んで、ありがたくなって泣きましたね。『個人

の暮らしをその人らしく守っていく』という私たちの理念に基づく実践が、非常時にあってもなされていることに感激しました。たしかに経営的には苦しくなる。でも、絶対に1人も辞めさせない。みんなに働いてもらう。こっちは職員にたいして、借金をしてでもやれることはやる。そう腹を決めましたね」

出先から駆け付けた職員たちの衝撃

こうして最初の夜は乗り切ることができた。しかし、夜が明けても状況が改善されていないわけではないことに、スタッフたちは改めて愕然とする思いだった。あたり一面が瓦礫で溢れ、車が散乱している。自分たちの置かれた状況が想像以上に過酷であることを、いやでも思い知らされる。

翌3月12日の早朝、消防署のレスキュー隊員が、ヘリコプターで施設の屋上に降りたち、被災の状況を確認した。緊急搬送者がいないことを確かめると、そのまま戻って行った。食料品や日用品の窮乏を訴えたが、「この施設は指定避難所ではないので、救援物資を置いていくことはできない」という答えが返ってきた。

幸いにも食事を委託している会社から、食料を届けに来たという連絡が入った。し

かし、東部道路から施設側には入ることができないという。男性スタッフ5名が、まだ水の引かない瓦礫の中に入って引き取りに行き、荷物を担いで戻ってきた。

一方、施設の被災状況の確認も進めていたところ、自家発電機が使用できることがわかった。燃料の重油の残量から、1日4時間の使用であれば4日間維持できるという計算をはじき出した。この4時間の間で、機器使用の必要な利用者への介護を集中して行うことにした。

13日。食料の受け渡しがあり、その際、自衛隊員の協力を得ることができた。外部の取引会社との連絡も取れ、寝具や排泄用物品、電池、電灯などの補充が可能であることが分かり、配送を依頼した。

一方、外にいる職員たちは、被災直後、なかなか施設との連絡がつけられずにいたのだが、少しずつ、「浸水しているが無事です」という状況報告のメールや、自宅待機の指示を受け取り始めていた。何人かが自主的に施設に向かおうとしたが、自衛隊員や警察官に止められ、東部道路から東側に入ることはできずにいた。「施設が浸水した」という連絡を受けたものの、その状況を具体的に想像することはできなかった。しかしこの日、瓦礫に埋もれていたなかを警察に先導されながら、公休となっていた



津波による海水が引いた後の「杜の里」の周辺。

30名の職員が到着し、入れ替わるように一部の職員が帰宅することができた。

次の記録は、自宅や出先で被災したスタッフによって書かれたものである。

《私が出勤できたのは震災から2日後でした。母と2人暮らしで、地震当日は休暇で一緒に外出していた。避難していた所に調子の悪い母を寝かせて、近所の方に様子を見ていただくよう頼んで出勤した。仙台東部道路を越えて施設に行ける道をさがすが、無理と分かかって、六郷小学校に車を駐車して歩き出した。防風林や大きな松がどうしてここまで流れつくのか、想像がつかない。田園地帯が荒野に変わっている。さっきまで家庭で使われていたストープ、ポット、炊飯器も流れてきている。子ども

の習字道具やおもちゃも。初日は夢中で歩いていたが、何日か過ぎてくると、こんなもので津波で流れてきたのかとびつくりさせられた。近くの馬術場からゼッケンを付けた馬も（流されて）横たわっていた。

東部道路の上まで登り、初めて陸の孤島、湖に浮かぶ杜の里の建物を見た。目を疑う光景だった。救援隊の中に佐藤施設長の姿を見かけてあいさつをすると、救援隊の人に「職員1人来ているので、行きます」と声をかけていただいた。（略）大きな倒木を避けながら、どろの上に敷いた板や畳の上を慎重に歩いた。途中、施設から帰る人たちとすれ違う。1人1人に声をかけてびっくりした。あの人もこの人も、日勤のほかパートの人も、2日間帰れなかったことがはじめて分かる。家族のこと、お子さんのこと、どんなに心配だったことかと思った。ユニットリーダーに來たことを報告すると、私の母のことを思っ、すぐに帰った方がいいと言っていた。夕方まで勤務して、翌日から連泊することにした。

食事は缶詰めがほとんどで、きざみ（食）の方の分はミキサーを使って用意した。日々皿にのせるおかずが増えてくると、私たちも嬉しくなっていた。（略）食器の消毒、衛生面はとくに注意した。《Iさん、女性》さらにもう1人。

《3月11日は公休で地震時には利府にい

ました。1時間前まで仙台新港にいて、そのままその場に、と思うとぞっとします。(略)3日目の夕方、やっと連絡がつながり、翌日、施設に向かいました。中学校に車を止めて歩いて施設に向かい、東部自動車道を抜けて見た光景に、言葉を失いました。

瓦礫の山になった景色。やっと人が通れる場所もぬかるみ、道路という道路がなく、やっとの思いで到着した杜の里は泥にまみれ、シーンと静まり返り、人がいるように感じられませんでした。施設の中も同じで、真っ暗な1階を見て、どうしたらこんな状態になるのか分からず、やっとの思いで3階までたどり着きました。利用者がフロアに集まり、衣類を何枚も重ねて寒さをしのぎ、疲れきってソファで休んでいる方や、タオルケットが足りずに2人で1枚を広げ、寄り添って過ごしていました。

食事のままならず、土鍋に入った雑煮を30人ほどで分け、1人一杯にも満たない量でした。この3日間、本当によく乗り切ったと思うと、どう言葉をかければよいのか分かりませんでした。リーダーを中心にしつかりとした基盤をつくっていましたが、本当に大変だったと思います。泣きながら状況報告する姿を見て、「あとは頑張るから」と言っても、どうしていいの不安

でいっぱいでした。》(Sさん、女性)

大きな緊張やストレスと、過酷な環境の中で疲弊し切っている利用者の姿が浮かんでくる。また一見、明るく、元気に振る舞いながらも、とてつもない不安を抱えながら接しているスタッフたちの心情も窺うことができる。

《岩手県北上市で震災を経験し、すぐに仙台へ母親と向かいました。(略)兄と祖母の安否が分かり、兄の体調も落ち着いてきた震災後から3日目に施設へ向かいました。今一番印象に残っているのは、今にも泣きそうな顔をしながら必死で入居者と接している先輩の姿です。震災当日からずっと眠れず、家族の安否も分からず、食事も十分にとれていない先輩の話を聞き、今度はその先輩に代わって私が頑張らなくてはいけないと思いました。施設の3階から家の方を初めて見た時は、本当に全てを失くしてしまったと、何も考えられなくなりしました。とにかく入居者に栄養、水分を摂っていただき、「大丈夫ですよ」と声をかけて回ることを、今を乗り越えること、せっかく助かった命だから乗り切れば何とかなると思いつながり過ぎていました。》(Oさん、女性)

や々と施設にたどり着いたとき、泊まり込んでいた職員たちと抱き合って泣いた、

と記すスタッフもいた。

理事長の、迫られる決断

記録からは、3月14日以降の事態がどう変容していったか、はっきりと読み取ることができない。

14日。午後、東部道路から施設までの道路が確保される。その直後、自衛隊から大量の食料と寝具が届けられる。状況把握も進み、職員たちは自家用車を流され、ほぼ全員が通勤手段を失っている。仙台市内では食料や生活物資の入手が困難になっているが、施設内には200名の入居者が生活しており、生命を守るためには介護業務を継続しなければならない。勤務体制について職員間で協議し、連泊が可能な職員は家族の了承を得て連泊する(家族にあっては食料不足が生じていたから、宿泊職員には救援物資から3食を支給することにした)。車で通勤の際は、まだ道路の瓦礫の撤去が完全ではないために危険であり、複数の職員が同乗して通勤することとした。

15日。動力ポンプの借用がなり、地下タンクから重油の汲み上げに成功する。4klの重油が確保されるが、自家発電の利用はこれまで通り1日4時間とする。

16日。環境保全会社へ浄化槽の汲み取り

を要請。水道局に対し給水車の出動を要請。
17日。浄化槽の汲み取り実施。仮設トイレを設置。

18日。灯油と石油ストーブがそろい、各ユニットに暖房が通る。

19日。被災した自動車(公用車と職員用)の移動作業が開始された。仙台市と東北電力の全面的な支援で電気が復旧。

20日。建物の調査を実施。貯湯槽、基礎が破損していることが確認される。現時点では、その他、建物自体の致命的な破損はないという。ただし電機・機械設備の損傷が激しく、また衛生面での不安が大きい。

23日。山崎理事長、短・中・長期の目標を具体的に設定する。

25日。理事長ほか、上京し、財務副大臣へ



「私が考えていた以上に、職員が育っていた。指示を待たない動きがないような職員は、1人もいなかった——山崎理事長は1人の犠牲者も出さなかった理由のひとつに職員の質の高さを挙げた。

要望書を提出。

4月5日。職員の勤務体制について協議し、給排水設備や暖房設備が回復していることから、4月中旬より介護職員の通常勤務を申し合わせた。

山崎理事長は言う。

「震災から10日ほどたつてからでしたが、仙台市長が緊急発動命令を出し、救急車が10台ほど来てくれたのです。これにはみんな感激しました。そのとき、これからどうするか。どこかへ避難させるかどうか、話し合いました。全入居者は200人。仙台市内で一番大きな施設です。50人とか10人とか分けたとしても、預けられた施設には大きな負担がかかるし、介護も行き届かなくなるだろう。職員たちに尋ねたら、ここで籠城しましょうというのが全員の結論でした。でも津波が来るかもしれない。そう尋ねると、ばらばらに移動した施設は、多くの方を2次災害で死なせている。残つてこのまま頑張るのがこの人たちの命をつなぐ一番の方法だ、ということが、職員が話し合つて出した結論でした」

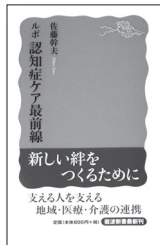
3月13日に、容態の悪化した利用者1名が救急ヘリによって搬送されるケースがあったが、これだけの悪条件の中、1人の死者も出さずに乗り越えてきたことは報告したとおりである。

山崎理事長は、「地震が来たのが夜だったら、まず駄目だったろう」と言つた。夜勤者だけで1階の利用者を避難させることは困難だし、避難後の対応についても、できることは限られていただろう。そして理事長は「私が考えていた以上に、職員が育っていた。指示を待たない」と動けないような職員は、1人もいなかった」とも言つた。

なぜこうした奇跡に近いような緊急介護が可能となったのか、次号でお伝えしたい。

『ルポ 認知症ケア最前線』

- 佐藤幹夫 著
- 岩波新書
- 定価840円(税込み)



超高齢社会に足を踏み入れた日本は認知症者の増加に今後どう対応していくべきか。本書は「地域連携」「ケアする人へのケア」といったキーワードを実践に現している現場の取り組み事例を紹介し、「認知症ケアのこれから」と21世紀における新たな社会連帯の形、を提示する。

■ さとう みきお
フリージャーナリスト

養護学校教員を経て2001年からフリージャーナリストに転身。著書に「目閉症裁判(朝日文庫)」、「裁かれた罪、目閉症の子もたまたま考えたこと(洋泉社)」、「ルポ 高齢者医療 地域で支えるために(岩波新書)」。近著に本連載が基となった「人はなぜひとを「ケア」するのか(岩波書店)。共著は「刑法三九条は削除せよ! 是か非か」、「少年犯罪厳罰化 私はいこう考える(いすれも洋泉社・新書)」など。